



HAL
open science

Bakumatsu-Meiji shoki no kirishitan minshû shakai no chiiki teki kôzô ni tsuite no ichikôsetsu

Martin Nogueira Ramos

► **To cite this version:**

Martin Nogueira Ramos. Bakumatsu-Meiji shoki no kirishitan minshû shakai no chiiki teki kôzô ni tsuite no ichikôsetsu. *Nihon-shi kôkyû / Journal of Japanese History*, 2012, 11 (36), pp.23-43. hal-01646094

HAL Id: hal-01646094

<https://hal.science/hal-01646094>

Submitted on 11 Mar 2020

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

日本史攷究

第三十六号

論文

平安初期における災害対応

山口 えり …… 1

— 予防の観点より —

幕末・明治初期のキリシタン民衆社会の

地域的構造についての一考察

ノゲラ ラモス マルタン …… 23

戦後史をどのように教えるか

太田尾 智之 …… 44

— 『鉄腕アトム』と『ゴジラ』の教材化 —

研究ノート

「松尾社境内図」について

松井 吉 昭 …… 63

新刊紹介

渡辺 伸夫著『椎葉神楽発掘』

星野 岳 義 …… 81

史跡めぐり

川越

谷 田 雄 一 …… 84

日 本 史 攷 究 会

2012年11月

山祭と称されている。これ以外にも、具体的な陰陽道祭祀として、同九年正月二十六日条では鬼気祭、同十九年二月二十九日条には「陰陽家鎮新居之法」、『西宮記』巻七裏書所引『醍醐天皇御記』延喜四年十二月十九日条では元慶年中に雷公祭も開始されている。本稿に深く関連する陰陽道の祈雨儀礼である五龍祭は延喜二年からみられる。なお、滋岳川人の活躍は『今昔物語集』にも載る。

(35) この年の五月二十日には、政府主催の神泉苑での御霊会の初見記事も『三代実録』にみえる。

(36) 『続日本紀』天平宝字二年に見えた「三合」もこのように説明できよう。

(37) 岡田莊司「平安時代前期の祭祀制」(前掲註8書)。

(38) 拙稿「延喜臨時祭式祈雨神祭条の再検討」(『延喜式研究』二二号、二〇〇六年) 参照。

(39) 岡田前掲註37では、淳和天皇と淵魚の女の間には良貞親王や内親王三人があり、淳和朝に補任されているのは、まさにミウチの関係に起因すると指摘する。

(40) 藤森馨、前掲註4書。延喜式では、祭主は神祇官に勤める五位以上の中臣氏のなかから選任し、その職掌を神宮への年四度使と神宮司へ下す公文書に必ず署名することと規定している。

(41) 井上亘「御体御卜考—古代日本の龜卜—」(武光誠編『古代日本の政治と宗教』、同成社、二〇〇五年)、小倉慈司「第一部「敬神」と「信心」と—古代—近世」(『天皇

の歴史09巻 天皇と宗教』講談社、二〇一一年)。

(42) 龍田の祭祀の意図については、拙稿「広瀬大忌祭と龍田風神祭の成立に関する一試案—祝詞の検討を中心として—」(『史観』一五八、二〇〇八年)、「広瀬大忌祭と龍田風神祭の成立と目的について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一四八、二〇〇八年)において述べた。また、岡田莊司「古代の天皇祭祀と災い」(『国学院雑誌』二二一九号、二〇一一年)なども崇る神と祭祀について論じている。

(43) 細井浩志「九世紀の記録管理と国史」(『古代の天文異変と史書』、吉川弘文館、二〇〇七年)、山下克明「陰陽家賀茂・安倍両氏の成立と展開」(前掲註20書)。

幕末・明治初期のキリシタン民衆社会の地域的構造についての一考察

ノゲラ ラモス マルタン

はじめに

一八六五年三月十七日、浦上の村民の十数人は大浦天主堂を訪問し、先祖から代々伝わってきた信仰をプチジャンという (Petitjean Bernard-Thadée 一八二九年・一八八四年) 宣教師に表明した。この「信徒発見」から、全国的・国際的な事件として知られることになる浦上四番崩れの発端まで二年である。浦上事件で肥前国のキリシタンの存在が表沙汰になり、彼らの存在をもちや黙認できなかった長崎奉行たちはこの村に密偵を派遣して、村落内の状態について報告させた。それらの報告で特に注目されるのはキリシタン民衆の広域的な組織化、キリスト教徒・非キリスト教徒の確執、キリスト教的一揆への恐怖である⁽¹⁾。一八六五年から一八六七年にか

けての二年間、宣教師の教えが広まった村落は浦上ばかりでなく、九州の数ヶ所の村民が宣教師と接触したという事実を為政者側は認識している。

本稿は一八六五年以降のキリシタン村落社会内のカトリック布教を扱う。キリシタン民衆社会の地域的構造と改宗運動・カトリックへの復帰運動の関係性は従来の研究においては十分検討されてこなかったというのが私見である。そこで本稿では、洗礼台帳・パリ外国宣教会の書簡・報告という史料を基にして、宣教師渡来以前の潜伏キリシタン社会における村落間交流の諸相をみていきたい。

従来の研究では、浦上キリシタンの事件に議論が集中した。周知の通り、浦上村民の多数はそもそも潜伏キリ

シタンであったが、早い段階でカトリック教会への合流を決心して、自らの信仰を隠すことを断念した。カトリックの信仰を表明したため、取り締まりの対象となつてしまつたのである。大橋氏はこの浦上キリシタンの信仰表明の原因を明らかにした。さらに、村社会と当局者が改宗の問題にどのように対応したのかということも論じている⁽²⁾。また、中村氏の研究はこの村民の信仰構造の解明に努めている⁽³⁾。しかし、カトリックの普及についての研究がまだまだほとんどされていないのが実情である。そもそも、一八六五年からカトリックへの改宗を決心したのは浦上村民だけでなく、肥前国のさまざまな村落にも同様の現象が窺える。逆に、改宗に対する抵抗感を見せたキリシタンの村落もあつた⁽⁴⁾。浦川和三郎⁽⁵⁾とフランシスク・マルナス⁽⁶⁾のようなカトリック系の著者は綿密に幕末・明治初期のカトリック教会の復活を紹介しており、一九世紀日本におけるカトリック教会の研究にとつて重要な貢献であるが、彼らのアプローチは賛美的、心情的なところが多々あり、学問的な厳密さに欠ける部分がある。そのため、キリシタン村社会内における改宗の意義をみようとしなかつた。彼らに

とつて、カトリックへの改宗は迷信の放棄と真理への決心を意味するのである。

だが、われわれは、キリシタン村社会内の改宗のプロセスに目を向ける必要があるのではないだろうか。片岡氏が指摘したように、長崎県内の潜伏キリシタンには二つの系統がある⁽⁷⁾。外海系と生月・平戸系の系統である。前者は主として外海地方・五島列島から構成されている。これは現代カクレキリシタン⁽⁸⁾を研究するのに非常に重要な点である。なぜなら、系統の中に伝承された習俗と文書に共通するものが多いから、たとえば、外海系の大集団だけに伝わつた『天地始之事』と『ごんちりさんのりやく』という文書が挙げられるだろう。よく指摘されるのは、外海系の大集団にカトリックへの復活が多くみられたのに対し、平戸・生月系のキリシタンには改宗者が少なかつた⁽⁹⁾、ということである。しかし、これらの大集団の構造・動向について従来の研究でほとんど言及されておらず、この点を明らかにすることが本稿の目的となる。

一八六五年三月から開始したキリシタン村落社会内の改宗運動の過程をみると、やや早い段階で長崎市内から

遠く離れた村落からの改宗者がいたと分かる。法律上、宣教師は長崎市内からの移動が制限されていたが、布教の際、すでに存在していたキリシタン村落間の交流をうまく利用できたため、カトリックの広域的な普及が可能になつたと思われる。したがつて、幕末・明治初期の改宗運動の実態を把握するため、宣教師渡来以前のキリシタン村落間の交流からみられるそれらの村の地域的構造を明らかにする必要がある。本稿の狙いは潜伏キリシタン世界の孤立的閉鎖的イメージを相対化し、彼らの信仰は村に限られることなく、遠く隔たつた地域でも同じ信仰を持つている村落があるのをキリシタンは認識していたことを明らかにすることである。換言すれば、一九世紀の西九州にキリシタンのネットワークがあつたということである。

本稿は三つの部分から構成されている。最初に、幕末・明治初期の当局側とパリ外国宣教会の報告に基づいて、一八六五年以降カトリックの信仰がいかにキリシタン村社会内に普及したのかを述べたい。次に、従来の研究ではほとんど用いられなかつた洗礼台帳の分析から、宣教師渡来以前に存在した広域的潜伏キリシタンのネット

ワークについて論じる。宣教師はこの広域的ネットワークを踏まえて、ある程度迅速にカトリック教理を広めることができたと筆者は考える。その上、洗礼台帳の分析によつて江戸時代後期のキリシタンの移動性は明らかとなるだろう。最後に、移住の原因と潜伏キリシタンの婚姻について述べたい。一八世紀後半以降の移住で、潜伏キリシタンの信仰は広域的に普及したが、移住地で非キリシタンとの縁組を避けようとしたのである。

一、カトリックの普及

1、キリシタン民衆の組織化と為政者側の反応

まず、幕末・明治初期のカトリックの普及について為政者側の史料からどのような情報が得られるのかをみていきたい。為政者側は一八六七年からカトリック信徒の広域的組織化に注目している。浦上村民が活躍していた地名が為政者側の報告に記されている。例として、慶応三年四月付の浦上庄屋の探索書には、次のような情報がある⁽¹⁰⁾。

御開港後洋僧渡来居留地二天主堂取建候以来右
宗再発追々余熾盛二相成当時二至候而者同類申
合類二近村之愚民共申勧め仲ヶ間二引入深夜二

は小船の洋僧を村中ニ迎取経文を習ひ或は居留地ニも密ニ相越異仏を礼拝いたし追々他領にも同類滋漫いたし候由……

この報告は浦上事件発生のすぐ後に作成された。同報告では、村落外の伝道を担当していた村民の名前と活躍範囲も記されている。その活躍地域は大村領・島原領・天草郡である。浦上キリシタンの事件を受け継いだ明治政府も、キリシタン村落についての報告を作成した。政府は次第に改宗者の居住する村落の名前が把握できるようになったことである。明治元年十一月の報告では、カトリック信徒のいる村落・地方の名前が書かれている(1)。

国々ニ而異宗信仰之もの人数探索左に申上候

- 一 肥前領外海檜山ニ而凡十人内外有之由
- 一 同断長田ニ而凡十人計有之由
- 一 同断黒崎ニ而凡三四十人位有之由
- 一 同断飛津(2)ニ而凡式拾人位有之由
- 一 同領伊王島大明寺ニ而凡四十人内外同馬込ニ而式拾人位有之由
- 一 五島ニ而凡三拾人内外有之由

2、カトリック教会へ復帰したキリシタン村落の分散(明治五年のバリ外国宣教会の報告により(3))

高札撤廃後、宣教師はかなり自由に移動できるようになったが、それ以前は、長崎港から離れることが困難であり、肥前国の島々・村々に分散されていたキリシタンとさほど接触することができなかったため、具体的にカトリック教会への復帰を決心したキリシタンの居住する地名が明記される報告はやや遅い段階で作成されている。九州地方のカトリック布教の状態を紹介する最初の報告はポアリエ宣教師(Poirier Jean-Baptiste、一八四三年・一八八一年)により一八七二年十二月に作成された。それ以前の報告では、村落の名前はほとんどなく、具体的情報を把握するのは困難である。ポアリエの報告にある情報を紹介して、明治五年のカトリック布教の状態をみていきたい。

報告では、長崎地方のカトリック信徒のいる地域は四つの区域に分けられている。一番目の区域は長崎市と浦上である。二番目は長崎港外の諸島と外海地方。三番目は五島列島。四番目は平戸諸島とその周辺である。一番目の区域(長崎市・浦上・大村)については、キリシタ

一 大村領老岐の辺より浦上住吉辺ニ懸け所ニ而都合凡百人内外有之よし、右之内重立候もの当時城下ニ而入牢罷在候よし

一 平戸領之もの信仰人数之義者追而探索可申上候

一 筑後辺へ異宗伝移いたし候趣相聞候ニ付探索仕候……

浦上キリシタンが村落内のみでなく、村落外でも宣教師の宗教を広めようとしたことは為政者側の報告から読み取れる。しかも、明治元年十一月の報告で注目されることは、浦上に「異宗」を学びにきた村民もいたということである(4)。

〔浦上村〕中野郷へ五島領之もの男女六人異宗経文杯修行之ため罷越滞留罷在候趣ニ御座候……

これらの史料から読み取れるのは、カトリック教理の普及へのキリシタン民衆の関与である。周辺の村落と連絡をとることは宣教師でなく、村民である。次に、パリ外国宣教会の報告をもって改宗の過程について述べたい。

ン配流事件(一八六八年〜一八七三年)で当地に信者の人数が非常に少なかったため、ポアリエの伝える情報も少ない。長崎市内の少数の家にカトリック信徒がいることを指摘しているのみである。

小区域	地名	家数
港外諸島・長崎半島	蔭ノ尾・神ノ島・馬込・大明寺・伊王島・高島・大山	262家
	永田・黒崎・出津・牧野・神浦	290家以上
外海地方		562家以上

表1 二番目の区域(長崎港外・長崎半島・外海地方)

小区域	村数	家数
福江島	凡そ20ヶ村	329家
久賀島	凡そ8ヶ村	85家
若松島	2ヶ村	15家
中通島	凡そ16ヶ村	254家
		683家

表2 三番目の区域(五島列島)

小区域	家数
平戸本島	200 家
黒島	198 家
馬渡島	25 家
	423 家

表3 四番目の区域
(平戸とその
周辺)

浦上を除けば、カトリックを信仰する家はおおよそ1650あった。ポアリエの報告によつて、8200人以上の信者がいたことが分かる。浦上キリシタンを合わせると、一万人に上ると思われる。それらの改宗者以外に、潜伏キリシタンが数多く残つていたこともポアリエは指摘している。生月島に8000人以上、そして天草・島原・大村・筑後・久留米にも潜伏キリシタンがいるというのはポアリエの推定である。合わせて、潜伏キリシタンはおおよそ二万人に上るのではないかと彼は述べる。その報告から指摘できるのは次の三点である。まず、明治初期の段階で、カトリック布教がやや広域的に広まったこと。改宗者の人数からみて、移動が制限されていた宣教師の布教は相当に成功していた。次に、長崎から近いところにあるキリシタン村落に布教がまだ浸透し

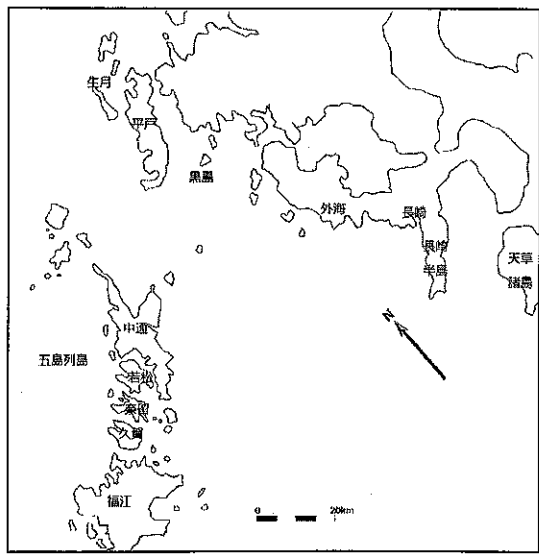


図1 西九州

ていない場合があることから、ある程度距離と布教状態は無関係であると分かる。例を挙げていえば、潜伏キリシタンの多い天草は長崎からやや近いにもかかわらず、当時はいまだ改宗者がいない。逆に、長崎から遠い馬渡島^⑮には改宗者がいる。最後に、新政府の情報はほぼ正確である。報告で重視されているカトリックの広域的普及はけつして無根拠ではないといえよう。

3、宣教師渡来以前のキリシタン村落間の交流について

通説として、普段江戸時代の潜伏キリシタンは近づきにくいところに居住し、孤立した生活を送っていたといわれている。しかし、ある程度迅速にカトリック教理がキリシタン村落社会内で普及し、さほど長崎から離れることのできなかつた宣教師と接触して以来、一・二三年間で、五島、外海、平戸、馬渡島までカトリック教会への復帰が広まったことが分かる。一八六五年の宣教師の報告・書簡を基にして、宣教師とキリシタンの最初の接触を検討しつつ、宣教師渡来以前もキリシタン村落間の交流がすでに存在していたことを論じたい。

パリ外国宣教会の資料から読み取れるのは肥前国のキリシタンが、次第に、長崎に留まっていた宣教師に自らの信仰などを表明してきたことである。しかし、それだけでなく、彼らはキリシタンのいる、あるいはいると思われる地名も次々に宣教師に教えた。一八六五年五月十五日、既にキリシタンの村落の位置についての情報が神ノ島(長崎港外)のキリシタンから宣教師に伝えられた^⑯。五月に情報を伝えた同人は八月十六日にも宣

教師に再びキリシタンのいる地名を教える^⑰。

これらの資料から言えるのは、宣教師が日本へ渡来した際、肥前国のキリシタンは同様の信仰を持つている村落の名前をある程度知っていたということである。キリシタン村落間の交流も存在していたことが窺える史料がある。同年八月十二日に、神ノ島のキリシタンが長崎から三十里離れている村の長を連れてきたという記載がある。同人は九月十四日に、出津という村までプチジャンを案内し、その村のキリシタンを宣教師に紹介した^⑱。宣教師がキリシタンのいる現場に赴く最初のことであった。同月二十九日に神ノ島のキリシタンは、宣教師にキリシタン村落である黒崎に遠出するように頼んだ^⑲。同書簡から、神ノ島のキリシタンが五島のキリシタンを宣教師のいる大浦天主堂に連れてきたことが分かる。これらの情報から指摘できることは、宣教師の渡来以前、外海(黒崎・出津)・神ノ島・五島のキリシタンの間に交流が相当にあつたということである。潜伏キリシタンの信仰の特徴は未知の者に信仰の秘密を洩らさないことであるため^⑳、お互いの存在を知っていないとすれば、神ノ島のキリシタンは黒崎や出津などに宣教師などを潜

入させることはできなかったであろう。一八六五年六月の布教状況を紹介する報告では、宣教師は、二十箇所以上のところにクリシタンがいることを述べている⁽²⁾。

宣教師は半年の間、ある程度存在していたクリシタン村落間の交流をもとにして五島・外海・長崎の近接の諸島の村民と接触していたといえよう。宣教師の報告から窺えるのはクリシタン民衆がカトリック宣教に果たした重要な役割である。宣教師は潜伏クリシタン村落間の交流を用いて、迅速にカトリック教理を普及させた。次に、洗礼台帳を用いて一九世紀半ばの潜伏クリシタン村落間の交流の構造をみていきたい。ここからクリシタン村落社会内の改宗過程が明らかになるのではないかと思われる。

二、宣教師渡来以前におけるクリシタン民衆社会の地域的構造・洗礼台帳の分析

1、洗礼台帳とは何か

宣教師の史料によって、あるクリシタン村落間の交流が存在していたことが判明したが、その交流の広さ・地域的構造を十分に把握するまでには至らない。村落間交

流を把握するには洗礼台帳が好適な史料となる。カトリック教会へ復帰した各々の村には一九世紀に日本語・ラテン語で作成された洗礼台帳が所蔵されている。従来の研究ではほとんど使われたことがない史料である⁽²⁾。当時の言葉で「お水帳」と呼ばれていた。お水帳というのはカトリック的戸籍である。日本カトリック教会の独自の史料でなく、カトリック教会では義務としてすべての司祭が作成しないとけない帳簿である。

基本的に、それらの洗礼台帳には、受洗した人、その人の父母と祖父母の名前・年齢(父母の場合のみ)・出生地が記されている。そのため、祖父母の世代までさかのぼることができる。例えば、一八七〇年に受洗した幼児の祖父母は一八〇〇年前後に生まれた。高齢者の場合(70歳以上)、一七六〇年迄である。洗礼者の祖父母の出身地から窺えるのは、クリシタン村落間交流の広さである。父母・祖父母に関する情報以外に、洗礼者の信仰生活(告解・聖体拝領・堅信)および洗礼を授けた人の身分(村の水方か宣教師か)についても情報が得られる。

お水帳の分析は数多くのことを見せてくれる。その一つは、村民の先祖の出身地である。そして、各世代の出

身地から、潜伏クリシタンの移動性についても明らかになる点が多い。洗礼台帳はクリシタン世界が閉鎖的であるという通説の相対化へ導いてくれる資料であろうと思われる。取り上げる事例は、一八七二年の段階で既に改宗運動が相当に進んだ地域の村落である。それらの村落の洗礼台帳を基にして、早い段階で改宗を決心した村落の間に近い地縁・血縁関係が存在したことを述べたい。参照するお水帳は五島の大曾(中通島)・大平(若松島)、長崎港外の蔭ノ尾、佐賀県の馬渡島のそれである⁽²⁾。これらの史料からクリシタン民衆の移動性・クリシタン村落間にあつた交流を分析していきたい。そのため、まず40歳・50歳クリシタンの祖父母の出身地を検討し、そしてそれらの村の20歳未満の村民の父母と祖父母の出身地を通じて彼らの移動性の程度を見ていきたい。

2、お水帳の分析・村民の出身地について

お水帳には洗礼者の父母・祖父母についての情報があるため、先祖の出身地までさかのぼることを可能とする。50歳以上の村民の祖父母についての情報をみていきたい。

大平・大曾の事例

地名	人数
櫻山	7人
神浦	4人
出津	15人
牧野	1人
赤首	3人
永田	3人
池島	5人
	38人

表4 大平・大曾村民(50歳以上)の祖父母出身地

大平・大曾の洗礼台帳は一八七〇年代の終わり頃に作成されたと思われるから、50歳以上の村民の祖父母は一八世紀後半に生まれていることとなる。分析したお水帳は二冊のみであるが、従来の研究で指摘されたように、明治初期のカトリック信徒のすべては一八世紀後半に外海から移住したクリシタンの子孫であろう⁽²⁾。一七九七年(寛政九年)五島藩主盛運は島内開墾のために大村藩主純伊に「入百姓」を乞うたが、それ以前すでに移住者がいたそうである⁽²⁾。

地名	人数
檜山	13人
出津	6人
黒崎	2人
永田	3人
高島	6人
馬込	2人
大明寺	1人
浦上	1人
天草	1人
	35人

外海地方→24人

長崎港外→9人

表5 薩ノ尾島民(40歳以上)の祖父母出身地

薩ノ尾島のお水帳は一八七七年に作成されたと思われる。40歳以上の島民の祖父母の凡そ70%は外海出身であり、25%が長崎港外出身であることから、島民の先祖はすべて外海出身であるとはいえない。このことに対する仮説は三つある。一つ目は、長崎港外への移住は五島への移住より早い段階で開始した説である。二つ目はそもそも長崎港外にキリシタンがいた説である。三つ目は潜伏キリシタンが薩ノ尾へ移住してから、非キリシタンと婚姻関係を結んだ説である。

地名	人数
平戸	4人
黒島	10人
出津	3人
黒崎	4人
	21人

表6 馬渡島民(30歳-50歳)の父母出身地(馬渡島でない場合)

馬渡島のお水帳にはかなり不備があり、250人以上から構成されているようであるが、長崎純心大学のキリシタン文庫では80人分についてしか情報がない。その上、作成の過程もやや不明であり、出身地と居住地が混同されている箇所が少なくない。洗礼日付と島民の年齢の欄も大抵空白であるため、作成の時代を確定することは困難である。最も古い洗礼は一八七四年である。一番新しいのが一八九四年。作成時代がやや遅いため、移住がそれほど顕著ではない。黒島出身の島民が多いようである。実は黒島の島民はほとんどすべてがキリシタンであり、外海地方から一九世紀に移住したといわれている⁽²⁶⁾。黒島教会に洗礼台帳が保管されている。

以上の三事例の分析から、馬渡島・薩ノ尾・五島の大

平・大曾カトリック信徒の先祖はほとんどすべて外海地方出身地であるといえよう。外海地方のキリシタンは五島だけでなく、さまざまな地域に移住した。しかも、移住者の子孫の中にはさらに移住した者がいる(外海↓黒島↓馬渡島)。早い段階で、カトリックへの改宗を決心した村落はそもそもその先祖が外海地方出身である。一八七二年の段階で、外海地方も改宗運動が相当に進んだ地方であった。

3、20歳未満の村民の父母・祖父母出身地の分析からみるキリシタンの移動性・村落間交流

開拓民であったこれらのキリシタンは移住してからの他の村落とどのような交流があったのかという問題を取り上げたい。そのためには、20歳未満の村民の父母・祖父母の出身地を見る必要がある。父母・祖父母の出身地を分析することによって、どのように移住地で新しい潜伏キリシタンのネットワークが成立してきたのかが分かるだろう。

大曾の事例

20歳未満の村民の父母(表7参照)は五島キリシタンの第二世代か第三世代である。第一代の五島キリシタンは外海あるいは外海周辺の村から来たが、表7から窺えるのは、五島キリシタンの村落の位置はとも分散的であるということである。五島キリシタンが居住した村落は小規模であったため、村落内の婚姻はなかなか困難であったのではない。20歳未満のキリシタンの父母はすべて五島出身であることから、一九世紀半ばに外海からの移住が減少・中断したといえよう。

20歳未満の大曾村民の祖父母(表8参照)は五島キリシタンの第一世代・第二世代である。表7と比較すると祖父母の出身地範囲はさらに広いとわかる。五島列島の南にある福江島・久賀島出身である祖父母はかなりのものに對し、中通島の出身者は極僅かである。外海キリシタンは先に五島列島の南に移住し、次世代は次第に他の島に移住したからであろう。そのため、大曾村民の祖父母の中には中通島出身者が数少ない。そこから、当島の非キリシタンとの婚姻関係を避けたと分かる。

地名	人数
檜山	26人
出津	3人
神浦	1人
永田	3人
黒崎	1人
神ノ島	2人
蔭ノ尾	4人
高島	5人
岳路	2人
大明寺	4人
深堀	1人
馬込	1人
島原	1人
天草	1人
不明	1人
56人	

外海地方→34人

長崎港外・長崎半島→21人

表10 蔭ノ尾島民(20歳未満)の祖父母出身地

地名	人数
檜山	7人
永田	1人
蔭ノ尾	18人
神ノ島	2人
岳路	5人
善長谷	5人
大明寺	2人
大山	1人
深堀	1人
五島	1人
天草	1人
サガ	1人
45人	

外海地方→8人

長崎港外・長崎半島→34人

表9 蔭ノ尾島民(20歳未満)の父母出身地

蔭ノ尾の事例

地名	人数
出津	4人
池島	8人
神浦	3人
三重田	1人
檜山	4人
平戸	2人
浦上	1人
豊前	1人
半泊	1人
測ノ元	1人
楠原	1人
塩水	1人
小浜	1人
古田	1人
月ノ浦	2人
堤	1人
久賀島	4人
奈留島	2人
大曾	2人
曾根	1人
42人	

外海地方→20人

福江島→6人

若松島→3人

中通島→3人

表8 大曾村民(20歳未満)の祖父母出身地

地名	人数
大曾	22人
焼崎	3人
蛤	1人
曾根	1人
奈摩	1人
郷ノ首	1人
有福	2人
月ノ浦	1人
堤	1人
小浜	1人
唐船	1人
官原	1人
塩水	1人
久賀島	7人
44人	

中通島→29人

若松島→4人

福江島→3人

表7 大曾村民(20歳未満)の父母出身地

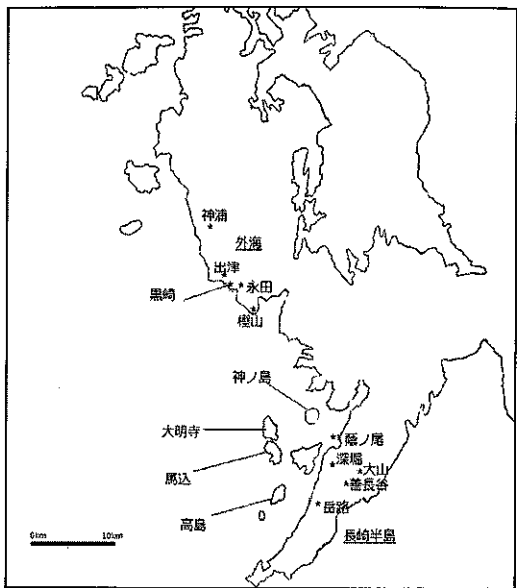


図2 長崎半島・外海地方

大曾の事例と比較すると(表7)、薩ノ尾島の場合、外海出身者との婚姻は少しあると分かる。外海と長崎港外諸島間の距離はさほど大きくないため、日常レベルでの交流は可能であったのだろう。先述のとおり、神ノ島のキリシタンは外海の出津・黒崎などへ宣教師を案内した。ポアリエの報告から分かるのは薩ノ尾島のキリシタンは少人数であることである(15家)。島民が少ないた

め、他島・村出身者との婚姻は不可欠である。長崎半島・長崎港外諸島に分散されていた村落のキリシタンとの婚姻が多い。20歳未満の父母・祖父母出身地からみて、当地の諸村落間の交流は顕著である。

洗礼台帳の分析から分かるのは、一八世紀半ば・後期以降外海地方から移住した潜伏キリシタンが多く、移住先は広域的であったということである。移住者の子孫は段々と新しいキリシタンネットワークを形成した。外海地方からの移住は徐々に減少したが、五島の場合は特に顕著である。婚姻関係からみる限り、非キリシタンの村落と交流がほとんどなかったようである。外海系のキリシタンの移動性は非常に高く、百年間、五島の南から次第に北まで進み、外海の南にある長崎半島と北にある黒島・馬渡島へ移住した。

天草と生月について考えてみよう。文化五年(一八〇五年)、天草下島西目筋の四つの村で、五千人余りの潜伏キリシタンの露見事件があったが、外海系と全く関係のないと思われる場所である。洗礼台帳の分析で、長崎港外・天草諸島の間縁組がほとんどなかったということも明らかとなった。前述したように、外海地方からの

各地への移住は一八世紀後半から開始したが、草諸島への移住の可能性はかなり低いと思われる。なぜなら、近世時代の天草諸島の人口は非常に増加し、五島などと比して、開拓地がなかったように思われるからである(2)。生月に関しては、分析してきた洗礼台帳からは判断しにくい。馬渡島の事例でみたように、かなり近いにもかかわらず、生月出身の移住者がいなかったようである。次に、外海系キリシタンの移住の原因について述べてきたい。

三、潜伏キリシタン信仰の普及に関して

1、移住の原因について

従来の研究では、一八世紀半ば以降の移住に関してはあまり分析されていない。とりわけ移住の原因はほとんど明らかにされていない。唯一移住の原因を分析した海老沢氏によると、原因は二つある。まず、キリシタンは生活の困難さを克服するために移住し始めたことを氏は主張している。ただし、海老沢氏にとって、主な原因は外海(大村藩)の宗教政策である。絵踏は嚴重であつたから、キリシタンは信教の自由を求めようと、宗

教監視が緩やかである五島列島へ移住をすることにしよう(2)。根拠として、氏は明治政府の史料を引用する。カトリック教会の活動を把握しようとした明治政府は各地のカトリック信徒に関する情報を収集した。五島列島の事情についての報告においてキリシタンの移住の理由が説明されている。

長崎近郷諸嶋嶋切支丹ノ蔓延ハ、三重村ヲ根元トス。三重村ハ旧大村領、旧佐賀領犬牙相接シ、旧大村領ハ旧来宗門嚴禁ナル故、絵踏ノ期ニ至リ邪徒脱走シテ平戸、五嶋ニ逃ル、所謂居付ト称スル者ナリ。当時平戸、五嶋ノ邪ヲ信スルハ皆其ノ子孫ナリ。又タ佐賀領ハ宗門嚴禁ナキ故ナリ。近傍ノ小嶋ニ移住シ、即チ大明寺村、大嶋、高島等、今日邪徒アル所ハ大体皆三重ノ末孫ナリ

移住の年代は誤っているが、一八六五年五月のバリ外国宣教会の報告にも同様の理由でキリシタンの移住が説明されている(2)。

彼の家族とこの国(五島列島)のキリシタンの多数は長崎出身であり、弾圧を回避するため、二百年余りの前に長崎を去った。

しかし、外海のキリシタンは五島のみでなく、広範囲で移住した。黒島へ移住した外海出身のキリシタンはその子孫が次の時代に馬渡島などに移住した。前述したように、五島列島における移住者の子孫も次第に北の方に移住していった。しかも、為政者側による数回の調査に直面した浦上村^②からの移住者が極僅かであることから考えると、宗教政策の厳重さは移住の主因ではないといえるであろう。

そのため、別の原因で移住を説明しないといけない。移住はキリシタン村落社会の人口過密に由来するのではないかと思われる。浦川氏によれば、一八世紀後半・一九世紀前半の間、五島へ移住した外海出身のキリシタンはおよそ三千人であるが^③、一八七八年のパリ外国宣教会の報告によると、下五島に2893人、上五島には2702人のカトリックがいた^④。その報告にはカトリック教会に未だ復帰していない潜伏キリシタンの人数は記されていないが、改宗者の人数からみると人口の増加は顕著である。浦川氏にとつて、移住の原因の一つは大村藩により実行された産児制限である^⑤。

大村藩では極端に産児制限を実行し、男子は長男

などを決めたのであろう。そもそも、外海地方でも信仰がいか所の村に限られたのではないのは確かである。先に述べてきたように、五島列島への移住者は外海地方の複数の村から来たのである。

2、潜伏キリシタンの婚姻

村落内高齢者の祖父母出身地の分析によつて、潜伏キリシタン間の宗教的族内婚が明らかになった。五島列島の大曾・大平の事例では、高齢者のすべての祖父母は外海出身であり、長崎港外の蔭ノ尾の事例では、一人を除けば、すべての祖父母は潜伏キリシタン村落出身である。潜伏キリシタンについて行われた取調べと宣教師の報告からそもそもキリシタンは非キリシタンとの結婚を回避しようとしたと分かる。教会法で直系血族・四親等迄の傍系血族間の近親婚が禁じられていた。早い段階では、教会法上違法の婚姻の問題が宣教師に指摘された。その理由の一つとして、非キリシタンとの婚姻の回避が挙げられている^⑥。潜伏キリシタン村落を対象とした取調べにしても、たとえば浦上三番崩れの際、彼らは「縁組も成丈け連中にて取組」んだとことが書か

だけを残して、その他は殺させてしまう。たとえば父母がそれを忍びかねて哺育したにしても、他家へ養子にでも遣わさない限り、之に家督の幾分でも譲つて分家を立てさすことを許さない。無論キリシタンは児を殺すことの赦すべからざる罪悪たることを心得て居る。しかし次男以下は藩内に留まって居ては何時までも日陰者で、一個の公民権すら得ること能わぬので、自然他領へ逃亡するものが多かった。

この説明は信じ難くはあるが、近世後期外海地方の人口過密の問題を裏付けられると思われる。筆者は、移住の主たる原因は経済的なものであると考える。人口過密で外海で生計を立てるのが不可能となり、移住することは当時の潜伏キリシタンにとつて当然な行動であったのだろう。個人的に移住したキリシタンもいたかもしれないが、かれらの多くは集団的に移住し、移住地においても同様の信仰のネットワークを形成しようとしたといえよう。そこから読み取れるのは、移住者にとつての信仰の重要性である。信仰の絆は外海キリシタンの移住を容易にしたのではないか。信仰のネットワークを利用し、移住地

れている^⑦。筑後国にある今村というキリシタン村落は一八六七年二月に伝道士の役割を果たしていた浦上のカトリック信徒により発見されたが、その発見のきっかけとなったのはその村についての噂である。その噂によれば、「今村と申所切支丹末流の村柄にて外村より縁与等不致由及承罷在候」とのことであった^⑧。浦上の伝道士にとつて外村と縁組しないことは潜伏キリシタンの特徴であったようである。

前述したように、長崎県内キリシタンの中に二系統(外海系・平戸生月系)があった。そして生月・天草のキリシタンは外海系と親戚関係を有していなかった可能性が高い。にもかかわらず、それぞれの系統の潜伏キリシタンはお互いの存在を認識していたようである。平戸島の事例について述べよう。宣教師の報告によると、すべての村落の宗教的慣習は同一でなく、暦・聖人祝日などからみて差異があった^⑨。自村と異なる慣習を有する村は全く別の宗教としてみなされていたのであり、信仰の呼称も変わった。宣教師によれば、キリシタンの中には系統は二つ存在していた。「キリシタン宗」(Kirichitan-chous)と「パチン宗」(Pateren-

(chous) という二つの系統である。その呼称は「クリシタン宗」村民により用いられたようである。早い段階では「クリシタン宗」の村落はカトリック教会へ合流したのに対し、「パテレン宗」は宣教師の教理に抵抗し、改宗者が少なかったというのは宣教師の報告にてよく指摘されている^⑧。「パテレン宗」が多く居たのは生月であり、平戸にはクリシタン宗とパテレン宗は混在していたようであるが、彼らはお互いに信用せず、仲がよくないという^⑨。クリシタン宗は早い段階で改宗したことから、外海系クリシタンをさすのではないかと思われる。その呼称は村の境を超越するネットワークの存在と所属の意識を示す。外海系クリシタンは自らの信仰が村だけではなく、広域的に共有されていたことを意識していた。

おわりに

一八六五年三月以降、潜伏クリシタン村落社会内で改宗運動が始まった。馬渡島・五島列島という遠地までカトリックが素早く普及したのに対し、生月・天草の村落には改宗者がまだいなかった。クリシタン民衆がカト

リックの普及に関与したことは明らかであり、長崎から自由に離れることのできなかつた宣教師にとつても重要な支えであった。その上、宣教師の報告から窺えるのは、クリシタン村落間の交流である。宣教師渡来以前もそれらの村々の間に深い交流があったのは確かであり、カトリックの布教を容易にしたのではないかと思われる。

洗礼台帳の分析から分かったのは、早い段階でカトリック教会へ復帰したのは主として外海系のクリシタンであったことである。一八世紀半ば・後半から外海地方のクリシタンは移住しはじめた。移住先は五島列島・長崎半島・港外の島々・黒島・平戸・馬渡島などであった。これは、それらの地域の中に血縁・地縁関係が存在したということを示明する。移住のプロセスにははっきりしてないところが多いが、外海のクリシタンは先に長崎半島の方に移住したと思われる。最後の移住先は馬渡島であろう。その前に、五島列島の全島・黒島・平戸等の地域に住み着いた外海系クリシタンがいた。逆に、生月・天草の潜伏クリシタンは外海系と無関係であるように思われる。改宗のプロセスを理解するため、それぞれのクリシタンネットワークの実態を把握する必要があると筆

者は考えるのである。最初の段階(幕末・明治初期)での改宗は地縁・血縁関係だけで行われたことでなく、それぞれの地域の間深い交流があったため、カトリックの普及が可能となったのではないだろうか。

次に、移住の原因について述べた。弾圧という原因は史料上根拠が少しあるとしても、けつして主要なものではないと思われる。むしろ、移住は外海クリシタン村落社会の人口過密に由来したと考えられるのである。移住者の求めたのは信教の自由でなく開拓地であり、集団で移住した。移住地ではクリシタン信仰組織を形成しようとし、非クリシタンとの縁組をできるだけ避けた。平戸の場合で明らかにしたように、外海系外の潜伏クリシタンとも縁組しなかつたのである。新しい移住者と人口の自然増加の影響で、近世後期を通じて、移住が続いた。百年間、外海系クリシタンは肥前国のさまざまな地域に進んだ。宣教師の報告から分かるのは、地域的にクリシタンネットワークが存在したことであり、そのネットワークは彼らの移住を容易にしたのは確かである。

クリシタン村落社会内の改宗プロセスを理解するのは他にも明らかでないといけない点が多く残る。外海

系クリシタン村落にて、最初にカトリックが普及したが、その「大集団」のすべての村落が改宗をしたわけではないのである。五島・外海のいくつかの村はカトリック教への改宗を拒否した。この原因を探るためには、村落内の社会構造もはつきりさせなければならないだろう。別稿にて取り上げたい課題である。

〔註〕

- (1) それらの報告については、大橋幸泰『クリシタン民衆史の研究』東京堂出版、二〇〇一年、第九章を参照。
- (2) 右同。
- (3) 中村博武『宣教と受容・明治期キリスト教の基礎的研究』思文閣出版、二〇〇一年。
- (4) 幕末・明治時期、潜伏クリシタンの分布について、田北耕也『昭和時代の潜伏クリシタン』日本学術振興会刊、一九五四年、一―四頁参照。
- (5) 浦川和二郎『切支丹の復活』日本カトリック刊行会、一九二八年。
- (6) Francisque Marnas『La religion de Jésus ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIXe siècle』Delhomme et Briquet、一八九六年。和訳がある。久野桂一郎訳『日本キリスト教復活史』みす

ず書房、一九八五年。

- (7) 片岡弥吉『長崎のキリシタン』聖母の紳士社 一九八九年、二二頁。長崎県以外に、天草諸島・久留米の今村にも潜伏キリシタン組織があった。
- (8) 宮崎氏はキリスト教解禁以降信仰を隠す必要がなくなったとしても潜伏時代の信仰形態を続けたキリシタンを「カクレキリシタン」と呼び、解禁以前のキリシタンを「潜伏キリシタン」と呼ぶ。宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会、二〇〇六年（第三版）、三〇—三二頁。
- (9) 川村信三『戦国宗教社会思想史』知泉書館、二〇一一年、二四—二四四頁。
- (10) 『幕末維新外交史料集成』財政経済学会、一九四三年、二四頁。
- (11) 『大日本外交文書 一・二』日本国際協会、一九三六年、六六—六六七頁。
- (12) 出津をさすと思われる。
- (13) 『大日本外交文書 一・二』六六八頁。
- (14) Archives des Missions Etrangères de Paris (以下「AMEP」略す) 569 5243-5254 一八七二年十二月三日。現在、馬渡島は佐賀県唐津市に属する島である。
- (15) AMEP 569 1325-1336 一八六五年五月十七日。
- (16) AMEP 569 1432-1443 一八六五年九月二日。
- (17) AMEP 569 1455-1470 一八六五年十月八日。

(19) 右同。

- (20) 『キリシタン民衆史の研究』一五四—一五六頁。
- (21) AMEP 569 1341-1348 一八六五年六月八日。
- (22) 筆者の知る限り、洗礼台帳に関する唯一の研究として、海老沢有道氏の以下の著作がある。『維新変革期とキリスト教』日本史学研究双書、一九六七年、第五章。
- (23) 筆者の利用した洗礼台帳は長崎純心大学キリシタン文庫に所蔵されている複写である。大曾 C-04501、大平 C-04401、藤ノ尾 C-04301、馬渡島 C-04101。
- (24) 『維新変革期とキリスト教』一四—一四六頁。
- (25) 内海紀雄『五島・久賀島年代記 藩政時代と明治前期を中心にした概観』福江市立久賀小学校創立百周年記念事業期成会、一九七六年、四一頁。
- (26) 『信仰告白125周年1865年〜1900年 黒島教会の歩み』黒島カトリック教会、一九九〇年、八七頁。
- (27) 宮崎克則『九州の一揆・打ちこわし』海鳥社、二〇〇九年、二八四—二八九頁。
- (28) 『維新変革期とキリスト教』一三六—一三七頁。
- (29) AMEP 569 1318-1324 一八六五年五月四日: *Sa famille ainsi que le plus grand nombre dans son pays sont originaires de Nagasaki qu'ils ont quitté pour fuir la persécution il y a deux cents et quelques années.*
- (30) 浦上の崩れについては、『キリシタン民衆史の研究』第五・六章を参照。

(31) 浦川和二郎『五島キリシタン史』国書刊行会、一九四三年、八八頁。

- (32) AMEP 570 1617-1639 一八七八年八月十五日。
- (33) 『五島キリシタン史』八九頁。
- (34) AMEP 569 1679-1688 一八六六年五月十九日。
- (35) 『日本庶民生活史料集成18 民間宗教』三一書房、一九七二年、八四頁。
- (36) 『邪宗門一件口書帳』(久留米郷土研究会誌、第六号、一九七六年、二頁)。
- (37) AMEP 569 1547-1551 一八六六年一月二十九日。
- (38) AMEP 569 1744-1757 一八六六年七月二十二日、或は、AMEP 569 1965-1977 一八六七年一月五日。
- (39) AMEP 569 1744-1757 一八六六年七月二十二日。